まず音にとっていちばん直接的な技術の革新というのはやはり録音方式だろうと思います。例のビートルズを育てましたジョージ・マーチンが、録音方式というのは確実に二十五年ずつで変わっていると言っています。最初の二十五年というのはエジソンとかベルリーナたちが、どうやって音を記録しようかと一生懸命遮二無二はい回った時代であり、その次はいわゆるアコースティック・ピリオド。三番目は、いわゆる電気的レコーディングの時代。そして四番目の一九五〇年ぐらいからエレクトロニック・レコーディングの時代が始まっている。そして一九七五年から、デジタル・レコーディングの時代が始まった。そんなふうに彼は分類をしており、そこまではたいへん興味があったんですけれど、さてそれじゃそれぞれの節目で、ソフトと言いますか歌が、どんなふうにこの変革に応じて変わったのかということを彼はちっとも説明をしてくれていません。またデジタル・レコーディングになってどんなふうになるのかということに関しても、技術的なことを少しは書いてありますけれども、歌がどう変わるかということは彼は何も書いていませんし、ヒントすら与えてくれていないわけです。私自身もそこのところをどうも明確にとらえることができないんですが、つまりデジタル・レコーディングというのが技術的にどういう意味なのかということは一応こっちへ置いておいて、いわゆるコンパクト・ディスクが多分、この秋に登場するとどんなことになるのかということを、たいへん随想的ではあるが考えてみました。

日本のレコード産業というものが本当の意味で企業化されたのは昭和三年ぐらいからだと思います。そのとき何が発生したかというと、大衆の歌というものが三分間になったんだと思います。もちろん大正時代にも『カチューシャの唄』とか『籠の鳥』とか今日的種類のうたはありましたし、もちろんレコードもありましたが、いちおう形ができ上がったのが昭和三年なんだろうと私は思っております。

じゃLPができたとき歌が変わったかというと、シングル盤という形式が残ってしまったために、許容量が五分になったり五分三十秒になったりということはありますけれど、あんまり大きく形を変えなかった。

それじゃコンパクト・ディスク（CD）になると今度はどうなるんでしょうかと。CDでいったいシングル盤なんていうものはつくれるのか。恐らく、技術的に言ったって、私はあんなにたくさん情報量が入るものでシングル盤なんてこしらえたってどうしようもないだろうなと思っております。CDが出てきたからといって全部がCDには絶対なりゃしないんで、今のレコードというのは残っていくだろうと思いますけれど、将来的にもCDだけになっちゃったとすると、今度はどうなるんでしょうか。つまりつくる人たちが今の三分から五分という制限時間を突破して、みんなさだまさしみたいに長い歌ばかりこしらえるのか、あるいは昔のように『戦友』ですとか『鉄道唱歌』だとか、『橘中佐』のように「何十何番」まであるという歌をつくるようになるのか、分かりません。あのころは歌が今の週刊誌みたいなマスコミュニケーションの役割を持っていましたからあんなふうに長いわけで、今はそんな必要がないからそんなことにはなりゃしないんでしょうけれど、それでも、入れるとなれば許容量がたしか片面一時間以上入るCDに、大衆音楽というものはいったい何を入れるんだろうかなということを、考えております。